The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	席をもうけるということ : アーレント政治理論と哲学カフェ
Author(s)	三浦, 隆宏
Citation	臨床哲学. 2003, 5, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6893
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

席をもうけるということ
——アーレント政治理論と哲学カフェ

三浦隆宏

哲学カフェCafé Philoとは、1992年にフランスの哲学教師マルク・ソーテによって始められた、「自然発生的な街頭での哲学の実践」[1]のことを指す。ここで「自然発生的」というのは、それがかならずしもソーテの意図どおりに始められたわけではなく、ひとえに彼が出演していたラジオ番組のリスナーの早とちりをきっかけにして始められたからである[2]。つまり、「この集まりは予定されていたのではなく、自然に始まった」[3]ものなのだ。

したがって、哲学カフェを〈実践〉するにあたって、彼のなかにそれに先立つなんらかの（哲学カフェにかんする）〈理論〉があったわけではない。むしろソーテそのひとは、哲学カフェの参加者に——もしくは、そのような熱心な参加者を生みだす「現代社会の危機的状況」[4]に——捕われ、巻き込まれていったのだ、と言ったほうがよいだろう。現に、彼の死後も哲学カフェはつづけられており、いまやそれはフランス国内はもとより世界各国で行われるまでになっている。哲学カフェがこれほどの拡がりをもちつづけている——それはひとつの「運動movement」ともみなしうる——その理由とは、いったいなんなのだろうか。

筆者は哲学カフェに興味・関心をもっており、研究室の仲間とともに、これまでにいくつか企画し、実際に開催してきた。では、なぜ私は哲学カフェに魅せられているのか？それは、そこで行われていることが、私の専門とするハナ・アーレントの政治理論——より正確にいえば、彼女の「活動action」概念——のひとつの具体的なありようを体現しているように思われるからである。彼女がその著作において書き記していた、「人間としての人間が姿を現わす、自治的な公的領域」（HC:212）、「あらゆる人間が現われることができ、自分じしんが誰であるかを示すことができる公的領域」（PP:80）というものが、哲学カフェにおいて（ささやかなかたちであれ）実現されているのではないか？——このような予感が筆者にはある。

本稿は、この感触を確かめることを目的としている。論述の手順としては、はじめに（１）哲学カフェで行われていることとアーレントの「活動」概念の特徴のふたつを突き合わせることにする。つづいて（２）哲学カフェの〈カフェ〉の側面に目を向け、「哲学カフェにおいて〈場所〉はいかなる意味をもつのか？」を彼女の考えを手がかりにして

考察する。そしてさいごに（３）哲学カフェの〈哲学〉の側面に目を向ける。アーレントの「活動」概念とかかわらせることで哲学カフェの〈理論的な意味〉を捉えようとする本稿の試みは、しかし、彼女が〈自分の専門は哲学ではなく政治理論である〉(cf.EU:1)と公言していた点で、大きな矛盾を孕んでいるのではなかろうか。あるいは、そもそも哲学カフェで行われていることは果たして〈哲学Philosophy〉と呼ぶにあたいするものなのだろうか。この問いはとりわけて、その言葉が明治期に輸入されてまだ130年ほどしか経たない[5]この国で、哲学カフェを推進しようとする私たちにとって、避けて通ることのできないものであると思われる。

１　哲学カフェで行われていること

哲学カフェとは、（１）10～30人ぐらいの参加者が、（２）２時間くらいの時間をかけて、（３）あるテーマについて「自分の意見を言い、他人の意見を聴く」営みである、とさしあたっていうことができる。ここでは、じっさいに私たちがおこなった「真面目（まじめ）」をテーマとした哲学カフェの様子を再現してみることにしよう。（ときは2002年6月16日（日）の昼下がり。場所は大阪市内にあるお寺・應典院の一室。15名のかたがたが参加してくださった。）

最初に「図書館で勉強していたら、まわりから『まじめ』と言われた」というある参加者の体験談が話された。その際この参加者は、「自分ではそのように（つまり、自分が『まじめ』であるとは）意識していないにもかかわらず」、という点を強調した。その後、「『まじめ』には、〈とりえは何もない〉〈言われたことしかしない〉という裏の意味がかつてはあったが、最近は逆に良い意味でも使われるようになってきたように思う」という意見や、「私はかつて『まじめ』と言われることが嫌だったけど、いまはむしろ嬉しい。なぜなら、それは〈一生懸命さ〉を意味してもいるからだ」という意見がつづく。その過程でたとえば、最近では「まじめ」とは言わず「マジ」と言ったりもするという指摘や、「まじめさにはプラス・アルファがあったほうがいいのであって、まじめさを求めつつも、そこから外れるものがある――そのほうがおもしろいのでは？」という問いかけ、および「この言葉は、『いいひと』という言葉の使われ方（「本当にいい人」という意味で使われるときもあれば、「どうでもいい人」という意味で使われるときもある）とよく似ている」という意見も出されていた。

そして、「『まじめ』という言葉は〈人の性格一般〉を指すほかにも、〈なんらかの行為〉にたいして言われるときもある」という意見から、「その場合、この言葉は100％の仕事をしないと気が済まず、融通をきかす、つまりグレーゾーンを受け入れることができない、ということを暗に意味している」という意見や、「やはりそこにも否定的なニュアン

スが含まれている」という感想がつづいた。さらに「まじめ」と「本気」の関係や、「辛いまじめ」の存在、「自分の姿勢（＝個人的価値）としては『まじめ』と考えるのに、社会的に見たら、つまり規範に合うか合わないかという観点からは、『不まじめ』と評価される場合がある」という「評価」の問題、またひとくちに「まじめ」といっても「深い意味で言うときとそうでないときがある」という言葉の〈さじ加減の違い〉などの点も指摘された。ここまでで、約1時間が経過。いろいろな視点から「まじめ」という言葉が洗い出されたことになる。

しばしの休憩をはさんで、進行役のほうから「残りの時間では、自分で感じる『まじめ』さと他人から評価される『まじめ』さの〈ずれ〉を主たる論点にしましょう」という提案がなされ、再開される。「仕事の場面で、状況的に求められて（いやいや）仕事をしていたことにたいして『まじめ』と言われたことと、その個人の性格としての『まじめ』さとは違う」という考えや、「他人にとってはその人がある枠・脈絡にはまったときに『まじめ』と評価する」という指摘など、このあたりになると以前に出てきた論点に立ち返ることが多くなってくる。そうして、そのときは見えていなかった側面が新たに発見されもするわけだ。このほかに、「自分には他人からの『まじめ』という評価を予想して行為することがある」という発言や、「他人の評価抜きに『まじめ』な人もいる」という指摘、「まじめ」のもつ〈遊びじゃない純粋さ〉というプラスの要素を見る必要性、および「(評価の)ずれに苦しんでいる人たちに目を向けることも必要」という意見などが出されて、この日の哲学カフェは終了となった。

２　意見を言うことの意味

ここからは、以上の具体的な経験を足場にしつつ、アーレントのテクストをも参照していくことにする。まず、先に記した参加者の発言が、いずれも「意見」の水準でなされていた点に着目しよう。一人ひとりの参加者が、じしんの〈体験〉や、「まじめ」という言葉にたいして抱く〈思い〉、他の言葉との〈関連づけ〉、あるいは他の参加者の発言に触発されるかたちで出てきた〈考え〉などを、自分の言葉で述べていたことに注目しよう。これは私たちが哲学カフェを開始するに先立って、あらかじめすべての参加者に確認してもらっている「ルール」のうちのひとつを反映した結果である。それは、「発言をするさいには、あくまでも『そのテーマについて自分が経験したこと、もしくは自分が考えたこと・思ったこと・感じたこと』を（たどたどしくてもよいから）自分の実感にもとづいて話すようにし、本を読んで得た知識や、他人から聞いた情報などは述べないようにすること」というものである。

だからこの場所では、たとえば「『やさしさ』という言葉は、辞書では〇〇と書かれている」とか、「誰それは『自己決定』について××と述べていた」といった「知識」や「情報」にかんする発言ではなく、一人ひとりの参加者が当該テーマにたいして抱く、「考え」・「思われ」を反映した発言が求められることになる。こうすることによって哲学カフェでは、参加者どうしのあいだに厳然として横たわる知識や情報の〈多寡〉を解除し、誰もが自分の「意見 opinion」――「『意見』とは、世界がみずからにどのように現われ、どのように開示されているのか（『私にはこのように見える』を意味する dokei moi から、doxa すなわち『意見』が派生する）を言い表わすものである」（BPF:51）――を言えるという点で、そして他の参加者の意見も自分の意見と同等の重みをもったものとして聴けるという点で、〈平等〉の空間を作り出そうとするわけである。ここで筆者は、かつてアーレントが「公的領域につきものの平等というのは、かならず、等しくない者の平等のことであり、等しくないからこそ、これらの人びとは、ある点で、また特定の目的のために、『平等化される』必要があるのだ」（HC:215）と述べていたことを想い起こさずにはいられない[6]。

しかし、「意見」と言えばたしかに聞こえは良いが、それは「臆見 doxa」（＝勝手に推測した意見）をも意味しているのであって、したがってそれは「真理」には程遠い「幻想 illusion に等しいもの」（BPF:233）でもありえ、それゆえいつまでたっても〈普遍的な地点〉に到達することができないのではないか？　というのも、「臆見」は「主観的な夢想や恣意的なもの subjective fantasy and arbitrariness ではないにしても、それはまた、絶対的で万人に妥当するなにか something absolute and valid for all でもない」（PP:80）からである。――このような反論がありえるだろう。それにたいして、私たちは以下に引くことばを頼りにこう応えることにしたい。だからこそ、共同で吟味することが必要となるのである、と。

> 意見というものはけっして自明ではない。われわれの思考が真に言説的 discursive であるのは、真理ではなく意見にかかわる場合である。意見にかかわるときわれわれの思考は、相争うあらゆる種類の見解を、いわばひとつの場所から他の場所へ、世界の一方から他方へと駆けめぐり、ようやく最後にこれらの見解の特殊性を超えてなんらかの公平な普遍性へと高まるのだ。（BPF:242）

あらゆる角度から（もちろん限界はあるにせよ）、意見が交換され、検討に付されることによって、その意見は少なくともその交換の場に居合わせた人びとにたいしては、公平で普遍的な言明としてその姿を現わすはずであろう。「ギリシア人は、意見を交換する

ことによって、理解すること――それは一人ひとりの個人を理解しあうことではない――、つまり同一の世界を互いの立場から眺めること、同一の事柄をまったく違った、しかもしばしば対立する側面から見ることを学んでいった」（BPF:51）とはアーレントのことばであるが、彼女において《公共性》とは、いっぽうでこのような〈共通世界への関与〉の観点で考えられていたのであった（cf.HC:52f.）。

哲学カフェではこうして、参加者どうしがおのおのの意見を交叉させながら、（あるテーマについての）「『臆見』をそれじしんの真実の姿において開示」（PP:81）し、ひいては「『臆見』を真実なものへと作りあげて」（PP:84）いこうとするわけだが、それはまた同時に「語ることを通じて、自分の意見に内在する真理を、自分じしんと他者とに開示させること」（PP:84f.）によって、その人の「誰であるかwho」――その人の「ユニークな人格的アイデンティティ」（HC:179）[7]――を他の参加者に暴露することへも通じてゆく。なぜなら、「自分じしんの意見を主張することは、自分じしんを開示し、他者に見られ、聴かれることが可能となることを前提としている」（PP:80、強調は引用者）からである。つまり、アーレントの考えにおいて〈自分じしんの意見を言うこと〉と〈自分じしん（＝who）を開示すること〉は表裏一体の関係にある、というわけだ。

こうして哲学カフェでは、参加者はたがいに他の参加者の「何者であるかwhat」――それは「その人が示したり隠したりできる、その人の特質、天分、能力、欠陥」（HC:179）のことであり、しいていうならばそれは、「知識」や「情報」のやりとりがなされる言語空間で明らかにされるものであろう――に出会うのではなく、その人の「誰であるかwho」に出会うことになるわけである。彼女において《公共性》とはもういっぽうで、このように人びとの「現われappearance」を開示する「現われの空間」の意味でも捉えられていたのであった（cf.HC:50,198f.）。

そして、以上のように（１）人びとの「何者であるか」を解除し、平等な空間を設定したうえで、（２）共通のテーマをめぐって、「知識」や「情報」を伝達するのではなく[8]、一人ひとりの「考え」・「思われ」である「意見」を言いあい、聴きあい、（３）結果として人びとの「現われ」を暴露する営みを指して、アーレントは「活動」（および「言論speech」）と定義していたのである[9]。

３　進行役の位置づけをめぐって

ところで、「人びとが自分の意見を言い、他人の意見を聴く」という点に着目した場合、それは「おしゃべり」とどう異なるのだろうか。哲学カフェは、ふつうに喫茶店で日常になされている「私的で親密な会話」を、ただ単に大人数でおこなっていることにすぎ

ないのではないか？

先にさしあたって哲学カフェを定義したさいには述べなかったことだが、哲学カフェにおいては、「進行役」と呼ばれる人が、そこでの話しあいを〈仕切る〉ことになっている。おしゃべりにおいてこのような「進行役」の存在は考えられそうにもないので、したがって、この点において哲学カフェと「おしゃべり」は明確に区別することが可能となるだろう。では、進行役の役割とはどういうものなのか。

進行役のことを英語では「ファシリテーター facilitator」という[10]が、これまでにかずかずの「ファシリテーション」を手がけてきた経験のある中野民夫は、その役割をつぎのように述べている。

> ファシリテーターは教えない。「先生」ではないし、上に立って命令する「指導者」でもない。その代わりにファシリテーターは、支援し、促進する。場をつくり、つなぎ、取り持つ。そそのかし、引き出し、待つ。共に在り、問いかけ、まとめる[11]。

つまり進行役とは、知識を伝える「講師」ではなく、場を整え、参加者どうしが互いの意見を言ったり、聴いたりするための「問いかけ」や「そそのかし」をおこなうことによって、参加者一人ひとりの体験や思い、感想などが引き出されてくるのを待つ、「支援者」・「助産師」だというのである[12]。

ここでの「助産師」という言葉は、私たちにたとえばソクラテスの「産婆術」という行為を想い起こさせもするだろう。プラトンが後期対話篇『テアイテトス』のなかでその語を与えていた、ソクラテスの営み――対話相手の探求のプロセスや思考の形成において彼が協力者、介添え役としての役割を果たすこと[13]――である。そしてここから、「哲学カフェにおいて進行役は、ちょうどソクラテスのような役割を果たしているのだ」と言ってしまいたい誘惑に駆られてしまいもする。

だが、筆者としては、これまでの進行役としての個人的な経験から、そう言い切ることにたいしていくらかのためらいを感じずにはいられない。というのも、〈ソクラテスが対話者に相対する場面〉と、〈進行役が参加者に相対する場面〉とのあいだには大きな違いが存在するように思われるからである。

プラトンの対話篇において、ソクラテスと問答を交わしている対話者の数は、せいぜいが３、4人にすぎず（『ゴルギアス』の場合）、少ないときにはたった１人である（たとえば『パイドロス』）。これにたいして哲学カフェの参加者は、少ないときでも10人、多いときには30人以上にもなる。このことからさしあたり帰結すると思われるのは、前者と較べて後者においては〈対話の輪〉が大きすぎるということ、したがって、もし仮に

進行役がソクラテスにならってある参加者の思考の「介添え役」になろうとした場合（そのとき進行役は、その参加者とのあいだで比較的じかんを要する問答をくり返すことになるわけだから）、他の多くの参加者を置き去りにしてしまう可能性が出てくるということである。つまり、数人の限られた参加者と進行役とのあいだの言葉のやりとりを、他の多くの参加者がただ見ているという構図になりかねないわけである。これは、哲学カフェの望ましい姿では断じてない。

このことから、筆者はむしろ、すべての参加者一人ひとりに対話の「支援者」・「助産師」としての役割を与えてみるべきではないかと考える。すなわち、「ソクラテスになぞらえられるのは、哲学カフェの参加者一人ひとりなのではないか」と考えてみたいのだ。この論点については、5節であらためて取りあげることにしよう。

しかし、そうすると問いはふりだしに戻ったことになる。哲学カフェにおける「進行役」の役割を、私たちはどう考えたらよいのだろうか？

残念ながら（というか、当然のことながら）、アーレントそのひとは、「進行役」という存在にたいする記述を、なにひとつ残してくれてはいないのだが、他方で彼女は「政治の領域はその権力の及ばない人びとや制度にかかっている」（BPF:261）と述べて、真理を語る者が立つ場所を「政治の領域」から除外するという考察をおこなってもいる。典型的な箇所を引用しておくと――

> 政治の領域の外の立場、すなわち、われわれが属している共同社会や仲間との交わりの外の立場は、独りでいるあり方のひとつとして明確に特徴づけられる。真理を語る存在様式に顕著なのは、哲学者の孤独、科学者や芸術家の孤立、歴史家や裁判官の公平、現地調査をした者や目撃者、報告者の独立である。（BPF:259f.）

ここから、哲学カフェにおいて進行役は、その場で話されている内容にはいっさい関与せず、その進行を取り仕切ることに専念することで、アーレントのいう「政治の領域」すなわち「公的空間」を成立させる、その〈境界〉に立っているのだと考えることができるのではないか。ウィトゲンシュタインには、「思考にたいして、その限界を定めうるためには、その限界の両側を思考できるのでなければならないだろう」（『論理哲学論考』序文）というよく知られたことばがあるが、進行役の役目はそのひそみにならって、発言者の言葉が「政治の領域」の内部の――つまり「意見」にかかわる――言葉であるか、それとも外部の――すなわち「真理」にかかわる知識や情報についての――言葉であるのかを〈見極める〉役割を、参加者の〈対話の輪〉の外に立つことで担っているのだと、とりあえずいうことができるのではないだろうか。

４　哲学カフェと〈場所〉の問題

それにしても、「哲学カフェ」とはなんとも語感の良い言葉である。そこでつい私たちも、安易にこの言葉を用いて自分たちの営みを「哲学カフェ」と称しているのだが、そこにはいくらかのためらいのようなものがないわけでもない。というのも私たちは、じっさいのところ、たとえばとあるお寺の一室や、喫茶店の貸し切りルーム、あるときは大学の教室など、いわゆる文字どおり「カフェ」と呼ばれている場所以外のところで哲学カフェをおこなっているからである。

その意味で、2003 年の春にパリの哲学カフェをふたつ見学したさい、そのうちのひとつが「FORUM 104」というコミュニティ・センターのラウンジとおぼしき場所で行われていたことには、いくぶん勇気づけられたものであった[14]。

おそらく、哲学カフェの「カフェ」という言葉は、かならずしも、文字どおりの意味で受け取る必要はなく、「誰もがそこに立ち寄れて人びとと出会える場所」ぐらいの意味で理解しておいてもよいのではないだろうか。もっともだからこそ、主催者側としては参加者が気楽に立ち寄れる「雰囲気づくり」が重要な課題となってくるのもたしかである。たとえば先の「FORUM 104」では、（参加者が席につく）丸テーブルのうえには色あざやかなテーブルクロスが敷いてあり、さらにそのうえには小さな鉢植えが置いてあった。いっぽう私たちが 2002 年の 9 月に、福岡で哲学カフェをおこなった[15]さいには、ある参加者から「最初、カフェといったくつろいだ雰囲気より、張りつめた雰囲気があり緊張した」と言われてしまったことがある[16]。

このように哲学カフェにおいて、「カフェ」という場所を仮に「かっこ」に入れることができるとするならば、そこでの人びとの集まりはある特定の「場所 topos」を越えた（meta-topical な）「空間」として理解できることになるだろう。この論脈において私たちは、アーレントが「ポリス」にかんして、たとえばつぎのように述べていたことを思い出すことができる。

> 正確に言えば、ポリスというのは、ある一定の物理的場所を占める都市−国家 the city-state ではない。むしろそれは、ともに活動し、ともに語り合うことから生じる人びとの組織である。そしてこの［ポリスという］真の空間は、［ともに活動し、ともに語り合うという］この目的のために共生する人びとのあいだに存在するのであって、それらの人びとが、たまたまどこにいるのかということとは無関係である。（HC:198、［　］内は引用者による補註）

たとえばアーレントは、公的領域のモデルとして「評議会 council」を取りあげているが、これも人びとがあるテーマにかんして話し合いをおこなうことによって（自然発生的に）作られた空間を制度化したものであると解することができるわけだ[17]。そしてまた、彼女が〈現われの空間は公的領域に先行するというかたちで存在する〉（cf.HC:199）と述べていたのもこの意味においてのことであった。だとすれば、「国会」という誰もが一見「公的領域」とみなす場所においても、そこに集まっている人びとが共通の議題について真摯に意見をやりとりするのではなく、官僚の書いた文章の棒読み、野次やおしゃべり（あるときは居眠り・・・）にふけっているのであれば、それは公的な「空間」であるとはけっして言えないということになるだろう。

本節のさいごに、アーレントの以上の考えを受けるかたちで、セイラ・ベンハビブがつぎのような指摘をおこなっていたことを示し、そこから勇気を得て、私たちはこれからもお寺や喫茶店の一室などで哲学カフェを開いてゆくことにしたいと思う。

> 公的空間は、（中略）かならずしも無条件にトポグラフィックで制度的な意味での空間でなければならないわけではない。つまり、人びとがそこで「協力行為」をおこなっていないのならば、市役所や都市広場はけっして公的空間ではない。したがって、地下出版されたものの朗読を聞くために人びとが集まったり、体制批判派が見知らぬ人びとと出会っているような私室は、公的空間となる。田園や森でさえ、「協力行為」の目的であり場所であるならば、公的空間となることができる。さまざまなトポグラフィーを公的空間にするものは、言葉と説得によって調整される共同行為が現にそこにおいて存在しているかどうかということである[18]。

５　哲学カフェは〈哲学〉なのか？

哲学カフェとは、参加者どうしがあるテーマについて自分の意見を言い、相手の意見を聴きながら、言葉のやり取りを進めていく営みであった。そこでは哲学書などからのことばの借用は避けられ、進行役が哲学的な知識を参加者に「教える」こともない。つまり、この場では専門的な哲学用語が飛び交うことはなく、おもに参加者一人ひとりのたどたどしくて、時として意味が容易には判じにくい、雑多な「意見」が表出されることになる。もちろん、進行役は個々の参加者の意見を結びつけることで、話されている内容に論理的な道筋をつけるよう努力するが、それもつねにうまく進むとはかぎらない。議論が錯綜すればまだいいほうで、さまざまな論点が列挙されて結局「時間切れ」とな

ることもたびたびである。じっさい、２時間という時間のなかでどれだけのことができるというのだろう。哲学カフェの議論のどこが「哲学」的だというのだろうか。

哲学カフェの「哲学」性――これについて考えてみるに先立って、ある作家のことばを経由しておく。そのことで、〈哲学カフェではどこまでできればよいのか〉の指針を得たいと思うからだ。

ノンフィクション・ライター高橋秀美の『からくり民主主義』（草思社）に寄せた解説「僕らが生きている困った世界」のなかで、村上春樹はつぎのようなことを述べている。「世の中のものごとには多くの場合、結論なんてないのだ」――とくにそれが重要なものごとであればあるほど、その傾向は強くなる。したがって、問題となっている現場に足を運ぶライターがそこで「真面目に足を使って取材すればするほど、たくさんの人の話を実際に時間をかけて聞けば聞くほど、結論が出なくなってくる」のは当然のことであって、「『みなさん、これが正しい結論だ！』みたいなものが、するりと出てくるわけがない」。むしろ、結論はますます遠のき、視点は枝分かれし、ライターも、そしてその読み手も途方にくれてしまう。「何が正しいのか正しくないのか、どちらが前でどちらがうしろなのか、どんどんわからなくなっていく」。かくして、彼の書く文章の「結末に結論はない」（274-277 頁）。しかし、「でも・・・」と村上はつづける。

> でも僕らはその結論のなさを彼としっかりと共有することができる。それが共有されているという確かな実感がそこにある。僕らは一章ごとに彼と一緒に弱ったり、困ったりすることができる。これは実をいうととても大事なことなんじゃないか、と僕は考える。みんなで輪になって座って、熱いコーヒーを飲みながら、「いや、困りました」とか、「ちょっと困りましたねえ」とか言いながら、頭をかいたり、ひげをしごしたり、腕組みをしたりすること。どこかから借り物の結論みたいなのをもってきて、大言壮語しないこと。そういうのは僕らの生活にとって、すごく大事なことなのではないだろうか？（277 頁）

ここで、１節でかんたんに素描しておいた「真面目」をテーマにした哲学カフェを想い起こしてみよう。そこでは、参加者からのさまざまな体験･意見が語られたあと、進行役によって「自分で感じるまじめさと、他人から評価されるまじめさのずれ」という論点が提出されたが、その「ずれ」にかんしてなんらかの結論が出ることはなかった。むしろ論点の提出によって、参加者は「他人からの（「まじめ」という）評価を予想して行為することが自分にはある」と語りだしたり、また、「そもそもずれがあることは悪いことなのだろうか？」と問うたりもする。

「結論が出ない」ということ――それは先の村上のことばを受け入れるならば、そのテーマが「重要なものごとである」ことのなによりの証左なのだろう。そしてこの「結論が出ない」という事実は、たとえ問題の解決へは向かわなくても、それの解消につながることが、ひょっとしたらあるかもしれない。少なくとも、個人的に「大問題だ」と思っていたことが、およそ自分たちの生きている「困った世界」ぜんたいの問題であることを知ることは、その人にとってはだいぶ「救い」となるのではないか。自分に固有の問題・欠点・悩みであると思い込んでいたことが、なんのことはない多くの人びとが共通に抱え込んでいるものであるということを知って、ふっとそれまでのこわばりがほどけた経験が、おうおうにしてひとにはあるように思う。ひとが〈世界〉に参入してゆく過程には、おそらくそういったことも含まれているはずだ。

さて、論旨を戻すと、哲学カフェの「哲学」性――これはソーテじしん強く認識せざるをえなかった論点である。というのも、「ファスト･フィロソフィー」[19]という揶揄や、「哲学的作業というものの次元を縮小して、人々に哲学を提供している」、「哲学を単なる思い付きによる議論、気軽な雑談にしてしまう」という批判がつぎつぎと彼にたいして投げつけられたからである。[20]

そして、アーレントのテクストを援用して哲学カフェを捉えようとしてきた本稿の作業にもまた、矛盾がある。というのも、哲学と政治とのあいだに「致命的な緊張関係a vital tension」（EU:2）を見いだしていた彼女にいわば逆らうようなかたちで、本稿は哲学カフェとアーレントの政治理論を重ね描きしようとしてきたのだから。

まず、うしろのほうから考えていくと、たしかにアーレントは哲学と政治とのあいだにある「大きな隔たり gulf」（PP:73）、その「緊張関係」を一貫して主張していたが、彼女によれば、両者の対立が生じたのは「歴史的にはソクラテスの裁判と断罪を嚆矢」（ibid.）とするものであり、したがってソクラテスそのひとがおこなっていた行為それじたいにおいては、この「緊張関係」は当てはまらないという点に注意すべきだろう。つまり、彼女がかつて「別れを告げた」（EU:2）哲学とは、プラトン以降にはじまる「哲学」なのであって、ソクラテスの営為それじたいはその対象から外れるわけである。このことは、彼女がソクラテスの「産婆術」を「ひとつの政治的な行為」であると述べていたことからも窺い知れる。

> ソクラテスにとって産婆術とは、ひとつの政治的な行為であり、基本的に厳密な意味での平等を基盤とする人びとのやりとりであった。そうした行為の果実は、これか、あれか、の一般的真理に到達する結果によって測ることができるものではない。（中略）何事かを終わりまで語りあうこと、何事か、たとえば市民のなんらかの

「臆見」について論議すること、これこそが、それじたい、じゅうぶんな成果といえるようなものと思われる。（PP:81f.）

「平等を基盤とする人びとのやりとり」を「政治的な行為」として規定したうえで述べられているここでの考えは、２節で私たちがおこなった議論の内容ともぴったり符合する。だとすれば、３節で差し出した「ソクラテスを参加者一人ひとりになぞらえてみたい」という私たちの仮説も、的を射たものであったということになるだろう。さらに、（引用における）さいごの一文は、先の村上のことばとも合致するものであるといってよい。それでは、なぜ、あるテーマにかんして「自分の意見を言い、他人の意見を聴く」ことが、私たちの生活にとって〈すごく大事〉で、〈それじたい、じゅうぶんな成果といえる〉のだろうか。哲学カフェの効用とは、いったいなんなのか？

哲学カフェという空間のなかで、参加者はちょうどソクラテスが「都市の広場を動きまわり、これらの『臆見』のただなかにいた」（PP:81）のと同様に、多くの参加者から発せられた「意見」という名の「臆見」のまっただなかにいる。そしてここでは、自分ひとりではなかなか得られないであろうさまざまな視点に触れることで、それまでに抱いていた自分の「臆見」が、あるときは破壊されたり、補修されたり、ということが起こるわけである。ここで起こっている、人びとの「対話」を介した一連の行ないに哲学（者）の成立を見るのは、西洋古代哲学を専攻する納富信留である。

自らの不知は、けっして自分一人では分からない。というのは、自己の完結した世界にひきこもることこそが、思いこみ（ドクサ）という最大の無知をひきおこすからである。異質な他人と出会い、外からの問いかけによりこの思い込みを打破する「対話」こそが、哲学者の生を成立させる。人々がソクラテスとの対話を必要としているように、実は、ソクラテス自身が人々との対話を何よりも必要としていたのである。それゆえ、ソクラテスは、自分は他人を論駁するよりもむしろ論駁されることを好んでおり、対話は相手の生だけではなくむしろ自らの生を吟味する、と語る。哲学の対話は、人と人とのギャップがもつ緊張において成立し、そこで私たちは、はじめて共に哲学者の生を生きる[21]。

引用文中における、「成立」という言葉は、かならずしも〈完成〉を意味してはいない。それはむしろ、〈生成〉をこそ意味していると解するべきであろう。あるいはそれは〈はじまり〉という言葉で言い換えてもよいかもしれない。ここで、ソーテのことばも引いておくと――

私はなにも、哲学の実践にはガヤガヤした騒音と人だかりが必要であると言っているわけではない。ただ単に、カフェで百五十人の参加者がいても「哲学的」と呼ぶに値する考察を始めることができると主張したいのだ。「始める」とは、達成することは意味しない。要するに……始めること。そこから先は各自勝手に、そうしたければテーマを掘り下げるなり、たまたま名の挙がった著作にひたるなり、議論の流れのなかで引用された著者と一対一の対話を始めるなりすればよいのである、そのときこそは完全なる静寂のなかで[22]。

本節のはじめにおいて私は、「哲学カフェの議論のどこが『哲学』的だというのだろう」と自問したが、いまや私たちはさしあたってこう応えることができるだろう。哲学カフェの空間内では、たしかに哲学的に「内容」をじゅうぶんに深めることはできないかもしれない。しかし、参加者はそこで（ソクラテスがおこなっていたのと同じ意味で）哲学をおこなっているのだ、と。そして今後さらに、哲学的に内容を深めていくうえでの、その〈入り口〉には少なくとも立っているのだ、と。

哲学カフェが、このように参加者が哲学をはじめるうえでのひとつの「きっかけ」を与えるものであるとするならば、それは、哲学の「はじまり」のさらにその一歩〈てまえ〉にあるものとして位置づけることができることになるだろう。この件をさいごに見ておくことで、本稿をいったん閉じることにする。

６　席をもうけるということ

「われわれが一緒に食事をとるたびに、自由は食席に招かれている。椅子は空いたままだが席はもうけてある」（BPF:4）。――これは、アーレントが『過去と未来のあいだ』序文のなかで引用している、詩人ルネ・シャールの箴言である。彼女はその序文の冒頭においても、「われわれの遺産は遺言ひとつなく残された」というシャールのことばを引用し、その意味するところを読み解いていたが、先の箴言にたいしてはそのような解読はとくになされていない。私たちは、シャールのこのことばをどう解したらよいのだろうか。

アーレントは〈自由〉を、人びとが活動の最中において経験するものとして考えていた。いわく、「政治の存在理由は自由であり、自由が経験される場は活動にほかならない」（BPF:146）と。したがって先の引用において、「一緒に食事をとる」とは、「一緒に活動する」ということを意味しているはずであろう。これは本稿の文脈でいえば、哲学カフェにおいて、「自分の意見を言い、相手の意見を聴く」ということに相当すると思われる。

したがって、〈ひとが（食事をとるために）椅子に座る〉ということは、〈ひとが活動をする心構えになる〉ということを意味し、そうすると、「椅子は空いたままだが席はもうけてある」という文章は、「（現時点で）ひとは活動をしようという気にはなっていないが、本人にその心構えができれば、いつでも活動できる状況になっている」という意味に解することができるはずである。アーレントは、ひとが活動をするのに必要なのは「勇気」であると述べていたが、[23]彼女の意味する「活動」とは、じっさい、たいへんなことなのである。

ところで、シャールが先の箴言において述べていた「席がもうけてあるthe place is set」その時点とは、端的に第二次世界大戦の期間を指している。彼（をはじめとするヨーロッパの作家や文人の一世代ぜんたい）は、フランスの陥落というまったく予期せぬ出来事に直面し、それまで第三共和国の公務に与ることなどぜんぜんなかったにもかかわらず、「真空の力forceに吸い込まれるかのようにして政治に呑み込まれ」（BPF:3）、なんの備えもなしに公的領域を構成させられたのであった。つまり、「席がもうけてある」状態とは、端的にいって「社会が破局に陥っている」状態のことにほかならないわけである。

さて、現代社会は私たちにさまざまな不安を日々与えてやまないが、破局するまでにはいたっていない。少なくともこの国においては、「超高齢化社会の到来によって、将来に財政が破綻する」ことは避けられそうにもないが、現時点では破局に陥ってはいない。つまり、（幸いなことに）「席がもうけてある」状態にはいまだ至っていないわけである。だが、多くの人びとがアーレントのいう「活動」の衝動へと駆り立てられつつあることは、最近のボランティア熱からもうかがわれるし、同様に、「人のまえで自分の意見を言い、他人の意見を聴きたい」という欲求が徐々に高まりつつあることも、筆者はこれまでの哲学カフェの実践からひしひしと感じているしだいである。

とはいえ、人びとのそういった衝動・欲求が、現代社会において〈行き場をなくしている〉のもたしかなことであるように思われる。というのも、山崎正和が『社交する人間――ホモ・ソシアビリス』のなかで述べているように、現代社会とは、「一方に都市の無関心の砂漠が広がり、他方に無数の小市民の排他的な家庭が貝のように閉じている」[24]状態として描き出すことができるからである。そしてこの山崎の指摘は、私たちの言葉でいえば「席がもうけられていない」ということにほかならないだろう。

だから、私たちは席を、場所をもうけなければならないのだ。多くの人びとに、自分の意見を言い、相手の意見を聴く機会を提供すること、すなわち「席をもうけるということ」――それが、現時点において私たちが「哲学カフェ」を開いてゆこうとするひとつの理由なのである。

註

アーレントのテクストから引用するさいには、以下の略号を用いて、頁数とともに本文中に記す。
HC:*The Human Condition*, The University of Chicago Press, 1998.
OR : *On Revolution*, Penguin Books, 1990.
BPF : *Between Past and Future*, Penguin Books, 1993.
EU : *Essays in Understanding 1930－1954*, ed. by Jerome kohn, Harcourt Brace&Company, 1994.
PP : "Philosophy and Politics", in *Social Research*, vol.57, No.1 (spring 1990) pp.73－103

1 マルク・ソーテ『ソクラテスのカフェ』(堀内ゆかり訳、紀伊国屋書店)、８頁。
2 同、27-28 頁。
3 同、27 頁。
4 同、8 頁。
5 「哲学の語は、明治７年（1874）に著された『百一新論』のなかで、西周が西洋語のフィロソフィの訳語として新たに造語した言葉である.」『岩波　哲学・思想事典』岩波書店、1119 頁参照。
6 アーレントの以下のことばも参照。「平等は、もしそれが政治的に重要であるべきなら、意見の問題であって『真理』の問題ではない」(BPF:246)　なお、彼女はこの〈平等〉観をアリストテレスから学んでいる。「アリストテレスによれば、共同体は必ずしも平等者から成り立っているわけではなく、逆にそれは異なった不平等な人びとの集合体としての面を強くもっている。共同体は、『平等化』のプロセスを通じて存在するようになる。政治的かつ非経済的な平等化が、『友情』である。」(PP:82f.)
7 アーレントはこのほかにも who を「特殊な唯一性 specific uniqueness」(HC:181)、「ある人物のいきいきとした本質」(HC:181)、「主体としての自己、他人と異なる唯一の人格としての自己」(HC:183) など、さまざまな言葉で言い換えている。
8 アーレントは「伝達と情報の手段」としてであるならば、言論は「記号言語 a sign language」に置き換えることができると述べている。Cf.HC:179
9 哲学カフェと「活動」概念の共通点としては他に、その「予言不可能性 unpredictability」という性質を挙げることができる。アーレントによれば、活動には「その結果が不確かで予言できない」という欠点があるのだが、哲学カフェにおいても結果（＝結論）がどうなるのかを予測することは誰もできないのである。
10 もっとも、Café Philo においては司会役のひとを animateur と呼ぶらしく、この言葉の英訳は「モデレーター moderator」である。桑原英之「哲学カフェの可能性――市民の対話の出発点」(『臨床コミュニケーションのモデル開発と実践』平成 14 年度報告書、所収)、140 頁注 4 を参照。なお、筆者は 2003 年の春にソーテの後継者の一人でもあるラミレズが司会を務めた Café Philo をふたつ見学したが、彼が参加者に負けず劣らず「よくしゃべる」姿がつよく印象に残った。
11 中野民夫『ファシリテーション革命－参加型の場づくりの技法』(岩波アクティブ新書)、iv 頁。
12 同、iv 頁および 17 頁参照。
13 『岩波　哲学・思想事典』「産婆術」の頁（594-595 頁）参照。
14 「フォーラム」という言葉にかんしては、たとえば千葉眞の以下の記述を参照。「ラテン語に由来する『フォーラム』という言葉は、もともと古代ローマの共和政治において、人々が公的事柄について意見を交換し、討議するために集う『広場』を意味したが、それは、現代的状況では市民の自治の空間として再定義してよいだろう。」(千葉眞『アーレントと現代』、岩波書店、157 頁。)
15 これについては、『臨床哲学のメチエ vol.10』40-41 頁参照。
16 先に参照した中野民夫は、「雰囲気作りに音楽は欠かせない」という。「人々が集まり始めてから開会までの間に、なごやかさや期待感を熟成させる BGM が流れているだけで、それなりの雰囲気を作ってしまう。また、途中の休憩タイムやグループ作業の最中などでも、音楽があると、なごんだり、活性化したり、ワークショップの流れをサポートしてくれる。」(中野、前掲書 60-61 頁)　おそらく Café Philo の場合であれば、エスプレッソメーカーのたてる音やギャルソンの声などがこの「雰囲気作り」に一役買っているのだろう。

17 「評議会が姿を現すばあい、それはきまって人民の自発的機関として生まれ、すべての革命政党の外部に発生するばかりか、党とその指導者の予期することにまったく反してであった。」(OR:249)

18 Sayla Benhabib,“Hannah Arendt and the Redemptive Power of Narrative”,in *Social Resarch,* vol57,No.1 (spring1990) p.194

19 ソーテ、前掲書、85 頁。

20 ソーテ、前掲書、88-89 頁。

21 納富信留『プラトン　哲学者とは何か』(NHK 出版)、40 頁。

22 ソーテ、前掲書、9 頁。

23 「勇気は、さらには大胆さは、自分の私的な隠れ場所を立ち去って、自分がだれであるのかを示し、自分じしんを暴露し、身をさらすという行為の中にすでに現れているのだ。この本来の意味での勇気がなかったら、活動と言論は不可能であり、したがってギリシア人の理論でいえば、自由もまったく不可能であろう。」(HC:186f.)

24 山崎正和『社交する人間－ホモ・ソシアビリス』(中央公論新社)、13 頁。